



櫻の首途

地

特 別
^5
6590
3(2)



ハ5
6590
3-2

集

けとうるねのふにまふく

ふまゝの帆のふりかた

松山

一 おもてをたぬかた月

松山

名録

さうくはつた方や山侯儀

松山

山

中



世と雖中と初一のひ一竹種くは
ふらねとせらひれて者多し者ねむ
ちうとく雅波津より横磨路に
かゝり月れすハ世もさへ入ぬ
られハ尋常ん老めるとは是れ福と
さすくハ早晩の盡いとかなぬ
山路とすしう破たらちひ今ち
力のふと痛しうとちあ、ぬれたに
るたさあつれては毎に食はるは
御おあつたさあつていしあつたは
いしあつたさあつていしあつたは

吟一のひ一さきあのふれはあひ
よせて御もる一白れ根りしうぬ

古筆

ふれむのうは子娘は種森子

あつてと 歌もなぬはあ
あは

くふいあはなをうとつらく

古筆

ゆかり新造はとくたのれあつた

牡丹はらりせあつてあつた
た話

うゝあてて丹ね女の別業富中巻

何とせしうえよりたふしうく
あつた樹木の尾跡泉石のおおき
部よ月夜おこりしちたしう
かゝりしうきしう

古筆

ちうくおひきまはたはうき

折うきまの軒のねん 細筆

六句表

細筆

冬はまた可雨ふあねの輝

うらふりあふおの月 古筆

海潮のあつちあつちと合まて 細筆

あつちあつちとあつちあつち 一折

一折あつちあつちあつちあつちの月 一折

あつちあつちあつちあつちの月 筆

名録

あつちあつちあつちあつちあつちの月 一折

あつちあつちあつちあつちあつちの月 一折

あつちあつちあつちあつちあつちの月

一折

あさる 別荘の標干たふく

柳中

あさる 柳中

あさる 柳中

約中吉伯はまに流く幣と標干即答の
鳴動はまに流く幣と標干即答の
鳴動はまに流く幣と標干即答の
鳴動はまに流く幣と標干即答の

あさる 柳中

あさる 柳中

あさる 柳中

あさる 柳中

あさる 柳中

たつふ郊外れはさよふ

古染坊

あまのつとむるはなはな

わらをよめれ花ふ都の梅月

あまのつとむる

紅代由

夕風の垣う様とあまのつとむる

あまのつとむるはなはな

古染坊

雨と文法も中や踏くらん

松雨

岩に腰うり流のさよふ

あまのつとむる

ゆるりれやうのつとむる

巴ト

ふし雲の口へあまのつとむる

子潜

斤^ウ里の月をわらうはなはな

物外

あまのつとむるはなはな

魚草

あまのつとむるはなはな

地風

わらをよめれ花ふ都の梅月

松雨

あまのつとむるはなはな

松雨

あまのつとむるはなはな

魚草

ふち高の梅と梅のこゝろ 飄々 里々

やうくぬくの魚といふる 梅例

板のやうなまゝのしるし 蟻の

遠よりりたる國音の揚 里々

もいふたこゝろの浮きあがり 貞柯

梅のうらたもてあはれいふる 小鷗

上高のこゝろの音の只いふる 吐玉

直なる人々の音解くべき 孤舟

遠くはこゝろの音の只いふる 孤吟

遠くはこゝろの音の只いふる 陸沈

初ちよたの音の只いふる 孤家

こゝろの音の只いふる 龜石

こゝろの音の只いふる 世漢

こゝろの音の只いふる 金甲

下高の音の只いふる 楚下

月とこゝろの音の只いふる 松田

よしの里の流るる月よきれば 高直

すきりくくたの二捨 暖山

室のしやの流るれば 如鵬

若果のきくはらへん子 雲鶴

よきあつこころはあめふれ 有梅

あのみかたふしあつたる 松石

よきあつこころはあつたる 子熾

よきあつこころはあつたる 机平

あはれ

机平

よきあつこころはあつたる

あつたるよきあつたる 山崎

あつたるよきあつたる 柳亭

あつたるよきあつたる 南天

あつたるよきあつたる 松亭

あつたるよきあつたる 常阿

あつたるよきあつたる 松亭

紫の解のらちくしほん
 ぬきた方じくすあまの口
 本名とてしんすいふは
 或のハまうたふふあは
 おろよ航とてふはあは
 利いんしんしんしんしん
 くのあまあめハ毎日
 石まのうまハあまのうま

山
 不先
 仏羅
 松下
 樵子
 芦花
 金糸
 和風

宿のゆき物とせらとてはく
 てもよるはあまのうま
 菊一麻れ友ハわくあ
 碧谷 竹下
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちん

山
 不先
 仏羅
 松下
 樵子
 芦花
 金糸
 和風

あまのなみのさかきまふ 波川

帆浦又よほつてふるさといは 梅川

きく響のふりー動ぬ 六二

かへ磨く鏡の影あつた 菅凡

あつたつてあつたあつた 春之

月に暈あつた躍りた好や 巴觶

あつたつてあつたあつた 第一

あつたつてあつたあつた 野々

女子あつたあつたあつた 麦里

いつつあつたあつたあつた 梅水

あつたあつたあつたあつた 水

あつたあつたあつたあつた 合甫

あつたあつたあつたあつた 祝

名録 四

あつたあつたあつたあつた 杉雨

あつたあつたあつたあつた 子

一 舟のきりぎりすのたねに 梅見
 花散るも流るる春の風を 梅月
 花散るも流るる春の風を 梅山
 山に花散るも流るる春の風を 菅喬
 花散るも流るる春の風を 金花
 花散るも流るる春の風を 和比
 花散るも流るる春の風を 汶川
 花散るも流るる春の風を 子潜

うらみしめて夕日さへも 梅見
 花散るも流るる春の風を 梅山
 花散るも流るる春の風を 金花
 花散るも流るる春の風を 和比
 花散るも流るる春の風を 汶川
 花散るも流るる春の風を 子潜
 花散るも流るる春の風を 梅見
 花散るも流るる春の風を 梅月
 花散るも流るる春の風を 梅山
 花散るも流るる春の風を 菅喬
 花散るも流るる春の風を 金花
 花散るも流るる春の風を 和比
 花散るも流るる春の風を 汶川
 花散るも流るる春の風を 子潜

梅見
 梅月
 梅山
 菅喬
 金花
 和比
 汶川
 子潜
 梅見
 梅月
 梅山
 菅喬
 金花
 和比
 汶川
 子潜

水引の細うらうら子なるれ、
 喜雨北晴るあくるすく先南、
 行田をこ画もわかきん切丁、
 いづまそうらうらを新秋七、
 心なまこあゆみおの月えは、
 子まはこもらと巻けくつら、
 玉の株も女ま物あなのおれ、
 日面にまあるあまのらんや部、

野々

麦里

枳水

お秀

楚亦

杉洞

暎崎

如勝

こまはる物あふい今先葉の南
 葉のむらるや雷に活々鱧
 葉はれふや板打はふ古の實
 晴切ら月おたきし葉をたむ
 ハ葉の活先のみた田植の南
 葉も掃のまはあふこまら葉浦れ
 けらくといふ葉のふるあうれ
 葉も枝のあふいよたや葉の声

五月や梅袖つくは月梅 冨新
 梅の香ありて氷餅 有梅
 衣るるもおきぬる月の 松石
 冨新くもぬる梅は白ひる 松園
 入る月の中をぬるさやちと 珍波
 梅の香あり遠くやとぬる 紫菀
 五月お里はちとぬる 里々
 梅の香ありぬるもの香 松葉

初きくも梅又ちとぬる 梅例
 介ハ梅く同ちつ田の香氷 巴ト
 五月もくもぬる梅の香 固口
 梅の香あり梅の香あり 不先
 梅の香あり梅の香あり 松秀
 梅の香あり梅の香あり 松坊
 梅の香あり梅の香あり 松坊
 梅の香あり梅の香あり 松坊
 梅の香あり梅の香あり 松坊

横中

しつゝし

積躰のかる龍いそる時ふ
坊

家くお中務かして日月雨
古

おとよと申十餘里のふぬとゆい
伯列梁子いふとるハ日月に成る

あぢきと入るる遠くお
古

伯良 采子

おやれとてむんとて采子とて
とよとよはふとるう子家お采子の
おまへとて免られて別荘とて産と
おられぬられハ中水り師のたな
さのふハ遠近の山中たる鞋と破
くふハとてとてなうて松とてす
是れ能得のま化るすや

古梁坊

ふら凡とるれ采もや枕とる

えいひやーおとるはのふれ凡
千家

おひらと大日堂もぬらひて
お采

多中

三

大ニッ物

名禄

暖るに炊置おさる柳うす 千巻
ふらしてハ又おくはふ暑うか 煮巻

水音亭記

伯列子よりる 老の谷子より 老の 字を あり
形を ありと 老に ありと 老と ありと 老と ありと 老と ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと

淋 味を ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと
老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと 老の ありと

凍解く

梅雨晴る

秋風り

あしころり

ふもはる水はる

お染坊

雲列

秋をむらぶ高は合や音部白
祝しやあを兜のあそ旗祝
うむ野よいさよ他人青首蒲
古 庭 坊

早子とちくねのいよあねもつた
あよれ追ぬよ帆と送ると矢のほ

一花ひよ願しお船とちとあは
経おやまうう兜の楫 枕
た 坊

雲列 ねの

かくて舟の昨非あつる 舟の麻疹よ
くくあやこて志づく何れもあつるよ
まれ伊浦とて舟一舟の柱とてはる
あるよとて志づく何れもあつるよ
か着のふら送んよと舟は角よし坊とてあ
いと出切らるる心をもと謝し坊でやうて坊と
漕出せよ又坊しれは景と海老かのくぬ
まうとて志づく何れもあつるよ

あまもも葉に長列なりぬり坊
坊

あま

松

十七

御前へは御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

加茂

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

御座り候へども
御座り候へども
御座り候へども

古澤坊

折ふゆりく関くなくふは 曾秀

希得ふにふふらましく

如染坊

復る凡の著るやあ大ふあふ

まぬ軒端入ふり一月 乾希得

日くの流袋ちりりてふ六呂吹れこの板が

舞ふるにふふのよふいひあうしく

家のまよとけあふと身しはりや

同くあふ付くやふふれあふ 古書

きく家とあくちる 物牛 呂琴

いしる肩のふたききたなをまのあふ

孫指ちてぬる市と舞ふはの果のま

あうくまぬる

古書

十海文信傳人 甘々 中家

錦 遊ふらけてあふ 本松 眉公

旭川子の大津あるふ家のあふ

女かあは重ふくはうあく流るふ

何指のあふにふふふふふふふふ

ふのまふのふふふふふふふふ

あふあふふふふふふふふふ

て亭よあらく

古堂房

その夢もはのちとらば垣か

くら木の世流つてあゆ 旭川

はとえての日は白電れぬの折

ねらふくまたちれたの二軸とびて

えはかまの折一は画録記

はとえての日は白電れぬの折

ねらふくまたちれたの二軸とびて

古堂房

水とらば流るる水銀の味

ぬれ香くくは垣かれ膳 白電

短歌

古堂房

山の井や釣瓶くつきて苔れど

後人くもる木の子れあ 古堂房

樹くれ方にあらふ木綿あて 古堂房

酒くちくくも香あうりく 麻原

存の雛くく又の月くさる 古堂房

つらむくくもあふくこのもは 古堂房

倍くちくくもあふくこのもは 眉紅

沖を渡り流流し白く 千菊
 流くくちの流流し白く 素面
 ちうんときさく凡の衝立 珍吹
 流流しをえり河の流流し 希得
 雛子の啼ても昔の沖く 似伝
 雨如るく早瀬とが流流し 旭川
 坊の流流しを流流し 公之
 花之くふ葉とめ流流し 亦嶋

小玉の口流流し 雲霞
 賓頭盧ハ流流し 梅浦
 藤てあんし流流し 珍
 石岡く月れ也流流し 坊
 流流しを流流し 秀
 葉内も小流流し 芳
 丸つれもハッ流流し 昌
 石智の双流流し 流

梅のやまのよはのよはのよはのよは

名録

歌よむかふの秘曲と筑地納 曾夷

春凡か納のたよおはなむ 麻瀬

空の暮るに流るるか小袖 呂琴

己月あかしのらあふとる 眉公

続もはま川かよの月 千菊

生切の梅香風よる かき 孝芳

あきかたの暇のあきり 素簡

夕まのあきり 珍心

あきり 安先

己月あかしのらあふとる 旭川

板橋の流るに念れ 似心

山の駕のあきり 梅南

かく見かぬ 里曉

漕棹の月 亦嶋

梅の月れ梅又なるに秋中
知得

れ柳のえより文通

日れ星のほえて昔より尾をぬ
楚白坊

舟里のたふ坊いそまねる枝雨墨落と
そ途一して紙吹葉のふり柳
せーら今言ふたあはれあらんく
あらんを連ねとこと六にぬらんく
其これ編戸をり一紙に

古風

途らぬ名をよるや其まき

かきとちくちくぬる里あまうりけと
佐白とあんにいしつらとさな氏に
仇指の社中よあはれとちまわると
岡とねとあまよのほほあらんぬ
まきゆらるるあはれ梅屋のそまはる
いしつらとくくまうし酒梅れ
こぬやうあるとあらんく

春 初春のやあはれ月之巻一冊
古風

初村

さうふ 昔志名氏 東のふと
さな氏に

竹葉のうへをいまして米をくわくと
のこしきさるるまじいからんをいふは
いゝいゝいゝいゝいゝ

古澤坊

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

穠く穠く穠く穠く穠く穠く穠く穠く

枕心

電心

文とて中をいふと穠く穠く穠く穠く
りていゝいと謝す

古澤坊

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

枕流

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

古澤坊

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

碩心

短ふり一折

鶴下りてあはるる唐紙のあはるる 固者
 春あぢきまのあしと花のうらら とい
 けいふふふふふふふふふふ 一柳
 春あぢきまのあしと花のうらら 緑川
 子凡ふふふふふふふふふ 花文
 清きあぢきまのあしと花のうらら 花月
 春あぢきまのあしと花のうらら 花月

八代

今やちと報恩の御利よお徳と
 祝さるる心静よ人衆遠はらるる
 ねん文凡雅よ用法の地とねん

お徳坊

世のさかしく政の声はあかしく

月影清くあはるる中 外中

静くあはるるの心静はらるる
 冷麺あはるるの心静はらるる

お徳坊

静くあはるるの心静はらるる

春あぢきまのあしと花のうらら 逸平

ふ中れ執ちりらふ中もぬふたの
ふのこたは僧侶又の婦人ともいふ
いふもあつたふくもあつた
いふもあつたふくもあつた

板雨を舟にこらふ東坡の
坊

ハ代と舞一と後とひらひ彼の大地の
は一舞のこらふ東坡の
坊
ふるくはあつたふくもあつた
坊
ふるくはあつたふくもあつた
坊

中

又雅のこらふ東坡の
坊
ふるくはあつたふくもあつた
坊

まなもあつたふくもあつた
坊
ふるくはあつたふくもあつた
坊

ハ中
坊

はあつたふくもあつた
坊
ふるくはあつたふくもあつた
坊

神あへまゝもたつてて 山

悟れぬの果の損を投ら 井

集行の言の白ひの流る 山

静ら古き心とけあし長色 文

月さふとたれくともせぬ 柳

あまのやまをたれく人歌く 山

石録

あまのやまの下のうらむの 山

あまのやまの神とたぬれ 文

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

あまのやまのあまのやま 山

短歌一物

維中

故きく火や暮し遠山松のそ

植をせし今昔うお亦 松原

側のきるくもなるとんねく 東明

くまのこ物れ獲ぬく 直心

登るくやふさふさ月影 更月

な用えの庵下と研く 堂心

くまのこ物れ獲ぬく 更月

は切しりぬぬの借りきり 甚心

かの産る沖て至瓶の吹ふり 至剛

ぬ泣をせさうなれ津河橋 岳六

あはれ心むとま例の仲るこれ 井心

そ産るくちくの種 年

名録

よ果よりなつては是を菊葉苗 東明

親は母とくちくまんと月影 直心

秋風ふ涼く枝と暮らさるる 六
 夕陽の影をわらわす 七
 花の影をわらわす 八
 月影をわらわす 九
 雪の影をわらわす 十
 雨の影をわらわす 十一
 雲の影をわらわす 十二
 霧の影をわらわす 十三
 霞の影をわらわす 十四
 雪の影をわらわす 十五
 雨の影をわらわす 十六
 雲の影をわらわす 十七
 霧の影をわらわす 十八
 霞の影をわらわす 十九
 雪の影をわらわす 二十

わさくしんかたの里へまゐりて物いぢ
 文を記す所の雅念をいふはこれに花お
 水の上つのお務め人事とわらわ
 二りて花よもくしてよとあはる

古の歌

味くよらうにあらはれし色とて

あはれにこのちりしつらきおま

今市

うそきてて花の影をわらわす
 花の影をわらわす

さつくき合ふるまはとほむ

古書

うのまららるるいそくつちまはらる

らふまらにたはらるるあは

古書

六句表

古書

あまのつちをばはらふまはらる

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

六句表

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

あまのつちをばはらふまはらる

古書

大津定通大東へも杖と雲と魚りと
あつらひたるてあつてかたはら遠るの
中一連これと招ふて能く徳とたふも

大津の内表

似年

川上へ遠く凡の螢り卯

月もわの久晴るる梅雨

か館のそ尾もいつと別まうや

きこふらと笑とほけぬ精進

あき

梅月

あき

舟はうらうらとあふ行名越く

あ一やうとあつとあつとあつと

名録

うら水のききもあつとあつと

人のききもあつとあつとあつと

扇中らせらるとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

之の

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ

名録

六句表

毎句

原のむねは浮くもつらふのあは

く木は氣をよれ甘れ暖 島原

つとほしきやとていも海は刺捨て 妻木

磯礫も程の遠はてらぬ 丸舟

拾ふさう定く月おたふれ玉 白糸

五石強し一巻ふれうす 白扇

久保

るすわわ小倉るるるる子 女 白糸

味の葉れえりりりり木 白扇

整なほいのよめくもくもく 丸舟

ふえんも幾^ナもくもくもくも 妻木

大東

六句表

二條

あはれおれよ文とくくを

ききれいもいもいもいも 白扇

ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ

和歌

ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ

ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ

和歌

ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ

ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ
 ちかきうららけの雨にきこゆへ

本師氏ゆりしハ父子とも正門イ
おろくしこのまをのりく彼の文をよ
まうたまのゆとちのひてをれ
一本にるるあまと書ふゆり

古巻

あゆりし松のあまのりたるま

るれしゆりし松のあまのりたるま

古巻

短かり一折

古巻

世はまるとゆりしゆりしゆりしゆりし

ゆりしゆりしゆりしゆりしゆりし

古巻

新定にまふまふまふまふまふ

古巻

今春ハ成成成成成成成成成成

古巻

聞しゆりしゆりしゆりしゆりし

古巻

舟のまふまふまふまふまふ

古巻

舟の内まふまふまふまふまふ

古巻

小春とりまふまふまふまふまふ

古巻

湖もまふまふまふまふまふ

古巻

纏て合たまふまふまふまふ

古巻

只習く笑りもたよるが事招 歴ふ

さうさうにさうとけよめさう 里の

まゆら馬かゝる様はく産地地 野茂

とくしんをさるゆふりは所 全交

久保

あはれや紙もたたくるあれ地 柳と

海子さうさうく産る花もと 野茂

貝やうよてさうた紙はくは干汁 酒な

さうさうにさうさうさう 長城

さうさうにさうさうさう かき柳 時中

さうさうにさうさうさう 津ふ

おきりかの中とさうさう油うり 里水

さうさうにさうさうさう 藜な

柳令よてさうさうさう さうさう 初綿

初書や指さぬさうさうさう 昔な

さうさうにさうさうさう 全交

送る大なる海から来るもの

海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの
海から来るもの

社

